

No. 87 (2023.3.3)

日本線虫学会ニュース

The Japanese Nematological Society News

目次

◆ 巻頭言 (奈良部 孝)	1
◆ 会長選挙及び評議員選挙投票のお願い (学会事務局)	2
◆ 日本線虫学会第 29 回大会を終えて (竹内 祐子)	3
◆ 第 29 回大会に参加して ① 「若手研究者優秀賞受賞報告」 (土井 健太郎)	5
◆ 第 29 回大会に参加して ② 「若手研究者優秀賞受賞報告」 (水越 雅人)	6
◆ 第 29 回大会に参加して ③ (川村 佳己)	7
◆ 第 29 回大会に参加して ④ (玉木 芳明)	8
◆ 第 29 回大会に参加して ⑤ (杉山 大騎)	9
◆ 第 29 回大会に参加して ⑥ (神山 匠己)	10
◆ 今村重元氏と一戸文庫のこと (荒城 雅昭)	11
◆ [書評] 「線虫 1 ミリの生命ドラマ」 (竹内 祐子)	15
◆ 編集後記	16

巻頭言

奈良部 孝（農研機構 北農研）

この3月いっぱい私の線虫学会会長としての任期が満了となります。4年間、皆様には大変お世話になりました。特に、学会事務局を務めていただいた、長谷川さん、伊藤さん、坂田さんには感謝の言葉が見つかりません。皆さんのおかげでコロナ時代の困難な4年間をなんとか乗り切ることができました。思えばこの4年間はコロナ禍に振り回された学会運営でした。会長就任初年目こそ、つくばで盛大な大会を開催し、優秀ポスター賞2名の方に直接表彰状を手渡すことができましたが、2年目は調整が間に合わずやむなく大会開催中止、3年目、4年目は主催者の皆様のご努力により、なんとかオンライン大会開催に至りました。開催可否や実施方法を巡り会長判断が遅れ、皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

私たちの研究活動のみならず、暮らしや社会・経済に甚大な影響を与えたコロナ禍ですが、

負の側面ばかりでなく、例えば、研究成果の発表方法や研究者の交流スタイルに新たな可能性が見いだされるなどのメリットもありました。日本線虫学会の運営においてもこの新たな潮流を取り入れられると良いですね。会員数200人程度の学会は新しいことを試すにはちょうど良い規模感です。次期会長にこれら構想の実現を託したいと思います。

差し当たり2023年度大会は、東京農工大の豊田先生にご尽力いただき、4年ぶりの対面での開催をめざし準備を進めているところです。まもなく皆さんにアナウンスできるものと思います。本ニュースの記事のとおり、オンライン大会も楽しいものでしたが、リアル大会には今からワクワクしています。会場にて、一線虫研究者として皆様にお目にかかりたいと思います。万障繰り合わせての皆様の参加をお待ちしています。

会長選挙及び評議員選挙投票のお願い

学会事務局

2023年3月末をもって、日本線虫学会の現役員の任期が満了となります。本学会則に従って、2023～24年度の会長選挙及び評議員選挙を実施します。会長及び評議員は本学会の運営に責任を持ち、その発展を左右しますので、その選出にはより多くの会員の意見が反映されることが重要です。

会長は、被選挙人名簿中の正会員から1名、評議員は、被選挙人名簿中の正会員から10名以内、を選んでいただくことになります。

会則第12条第2項「会長は、会員の投票によって選出する。連続して3期以上の任期を務めることはできない」ということですので、2019～20年度および2021～22年度の2期連続で会長に選出された奈良部孝氏は、今回の選挙で会長に選出されません。

今回は「ウェブ選挙」を実施します。選挙権をお持ちの学会員には選挙案内メールをお送りします。案内にあるリンクあるいは右のQRコードよりWeb選挙ページに入ってください。選挙案内メールにあります「組織ID」「ユーザーID」「パスワード」を入力すると、会員投票ページに変わります。ユーザーガイドに従いご投票をお願いします。投票期間は右記のとおりで、期日を過ぎると受付が終了となります。投票の際には本選挙に係る[会則](#)及び[選挙細則](#)も参考にしてください。

日本線虫学会

2023～24年度 会長・評議員選挙
(ウェブ選挙)

投票期間

開始日時：3月6日(月) 10:00

終了日時：3月19日(日) 23:59



日本線虫学会

2023-24年度

会長・評議員選挙

日本線虫学会第 29 回大会を終えて

竹内 祐子 (京都大学)

去る 2022 年 11 月 4 日 (金) ~5 日 (土)、日本線虫学会第 29 回大会が開催されました。コロナ禍のあおりを受け、2020 年の有志による線虫学ミーティング、2021 年の 28 回大会に続いて 3 回目のオンライン形式での会合となりました。学会員は参加費無料、途中出入り自由のオンライン大会ということもあってか 158 名と多数の参加申し込みがあり、発表はシンポジウムの招待講演 2 題、一般発表 (= 口頭発表) 11 題、インタラクティブ発表 19 題 (うち 3 題は要旨不要のブリーフプレゼン) の計 32 題でした。インタラクティブ発表では 14 名から若手研究者優秀賞へのエントリーがあり、厳正なる審査の結果、水越雅人さん (中部大) と土井健太郎さん (明治大) のお二人が受賞されました。大会本番の熱気あふれる議論の様子については他の方々からの報告に譲るとして、本稿では開催までと当日の舞台裏をご紹介します。

コロナ禍も 3 年目、もはや非日常が日常になってしまった感は否めませんが、そんななかでも学生にとって研究生活 1 年の長さは変わりません (いえ、もちろん時間そのものは誰にとっても変わらないのですが)。年に一度、日頃の研究成果を発表・議論する場をなんとか堅持したい、そして線虫学会のアットホームな雰囲気や若手参加者、特に学生さんにも感じてもらいたいということで、いつも以上に若い世代を意識した構成となりました。大会 2 日目に「線虫学で就職」をテーマに掲げてシンポジウムと企業ブースが設けられ、線虫学分野でのキャリアパスが紹介されたのもその一環です。学生会員だけでなく一般会員にとっても、普段なかなか

かお話を伺うことのできない企業の方から直接生の声を聴ける貴重な機会となりました。企業ならではの制約もおそらく多かったであろう中ご快諾いただいた原田祐樹さん、森山誠さん、そして企業ブースを設置していただいた石原産業株式会社のみなさまに改めてお礼申し上げます。また、2018 年度大会でポスター賞が創設されたのをきっかけに始まった若手研究者の研究発表に対する表彰制度ですが、今回初めての試みとして、学会役員だけでなく参加者全員に審査員としてご協力いただきました。学生時代、他者の発表を評価する機会はなかなかないものです。この経験を通して大会運営に参加している当事者意識であったり、自分の研究を客観的にみるきっかけ、今後の研究生活や学会発表へのモチベーションにつながってくれることを願っています。

さて、今大会の事務局は佐賀大の吉賀豊司先生を会長、中部大の長谷川浩一先生を副会長に擁し、他に所属の異なる有志 7 名を加えた 9 名がオーガナイザーとして参画しました。所属の垣根および物理的距離を取り払えること、講演要旨集を紙媒体で準備する手間が省けること、そして大勢の参加者が一堂に会するための会場を確保する必要がないため開催費用、ひいては参加費を抑えられることがオンライン開催のメリットと言えそうです。また、過去のミーティングおよび大会でも言われていたことですが、オンライン発表でも質疑応答は意外と (?) 盛り上がるというのが実感としてありました。特にインタラクティブ発表ではお互いの顔が見えることもあって (ブレイクアウトルーム参加者の人数にもよりますが)、じっくり議

論を深めることが可能でした。一方で、発表の合間の雑談や懇親会がないというのはやはり寂しいものがありました。また、Zoom ミーティングはホストの置かれた中部大学の全面協力のもと、長谷川先生がオペレーションを担当されました。今回私自身は諸事情あって現地入りしかなかったのですが、現地入りした他のオーガナイザー、また当日の運営スタッフとして中部大学のみなさま大勢のご尽力があったように、やはりミーティングの^{つつが}悉ない進行

には現場で支える存在が不可欠であったことも申し添えます。世代や所属、専門分野を超えて線虫学に携わる仲間が交流する場として学会が果たす役割は大きいものです。次年度の大会が対面となるかオンラインとなるか今後の社会情勢次第ではありますが、どのような形式であれ来年度 30 回目の大会が開催されることを祈りつつ、29 回大会後記とさせていただきます。

第 29 回大会に参加して ① 「若手研究者優秀賞受賞報告」

土井 健太郎 (明治大学)

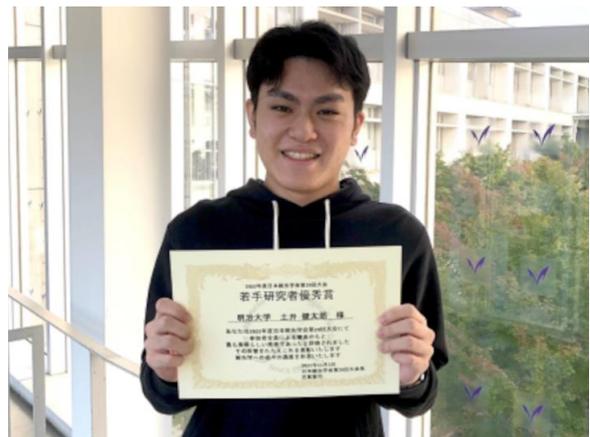
皆様はじめまして。明治大学植物線虫学研究室に所属しております、博士前期課程 1 年の土井健太郎と申します。この度はインタラクティブ発表において、若手研究者優秀賞を授与して頂き、誠にありがとうございました。このような賞を頂くことは初めてでしたので、非常に嬉しく感じております。今後もこれを励みとして、研究に邁進していきたいと考えております。

本大会にて、私が発表したテーマは「マツノザイセンチュウの交尾行動観察で明らかになった交尾における雌の協力」です。線虫学会においては、皆様にあまり馴染みのないテーマかもしれないと大会前は考えていましたが、終わってみれば非常に多くの方に発表を見て頂き、様々なご質問や意見も頂きました。やはり、自分が研究していることに興味を持っていただけることは、非常に幸せなことであると実感しております。発表の中では、考えたこともなかったようなアイデアも頂き、今後の研究に向けて有意義なディスカッションができたと感じております。このような素晴らしい機会となったのは、日頃よりご指導賜っております新屋良治先生や浴野泰甫先生をはじめ、一緒に研究をしている明治大学植物線虫学研究室のメンバー、および私の発表を聴きに来てくださった方々のおかげであると強く感じております。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。また、大学院への進学を、嫌な顔一つせずに後押しし

てくれた両親にも深く感謝しています。両親にこの賞を頂いた報告をした際には、自分のことのように喜んでくれました。これで、少しは親孝行できたのかなと思っています。

本大会は昨年に引き続きオンラインでの開催となりました。私が研究室に入室した 2020 年の 4 月は、新型コロナウイルスが流行し始めた時期であり、私が参加したこれまでの学会発表はすべてオンラインとなっています。そのため、オンラインでの発表には慣れてきたところではありますが、来年の線虫学会においては実際に会員の方々とお会いして、より深いディスカッションができればと思っています。

最後になりますが、これまでご指導賜った先生方、本学会の運営に携わった方々に厚く御礼申し上げます。今後も自分の研究をより良いものへ発展させていけるように邁進していきたいと思っております。



第 29 回大会に参加して ② 「若手研究者優秀賞受賞報告」

水越 雅人 (中部大学)

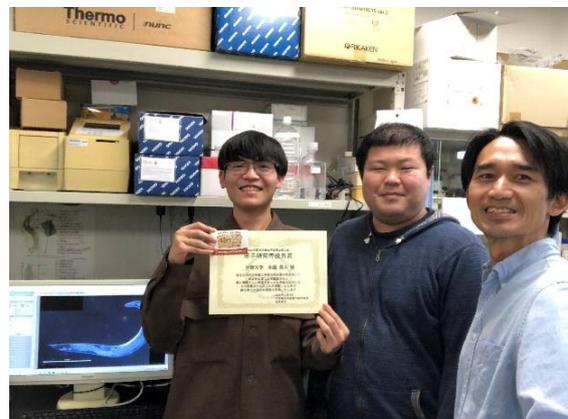
中部大学大学院長谷川研究室、博士前期課程 2 年の水越雅人と申します。今回、第 29 回大会では若手優秀研究者賞を頂戴しましたので、この場をお借りして受賞報告をさせていただきます。本大会では前年までとは異なり、参加者による投票で受賞者を審査する形式でした。そんな新しい試みの中、素晴らしい賞を授与していただき誠にありがとうございました。限られた時間の中ではありましたがその中でも多くの方に評価していただいたことは非常に嬉しく思います。同時に私達の研究テーマが受賞できたことを誇りに思います。今回の発表だけで満足せず、論文投稿や新しい発見を出来るように精進してまいります。

私は「両生類宿主の“変態”と寄生性線虫」との関係について研究しており、一昨年の線虫学ミーティングから参加し始めて今回で 3 回目の参加です。回を重ねるごとにデータの更新した内容で発表することができました。中部大学の実習農場のヌマガエルから研究を初め、調査宿主範囲や、採取地域を広げて研究を進めてきました。野外調査では深夜大雨の中、苛酷な採集をすることもありました。そんな苦楽や紆余曲折を経て集めたデータをまとめ発表に至りました。

本大会当日、私の発表していたブレイクアウトルームにはありがたいことに多くの方が聞きに来てくださり、発表時間の目一杯までディスカッションすることが出来ました。発表中は学会賞のことは頭からすっかり抜け、心地よい緊張感の中、線虫、両生類談議に花を咲かせておりました。多くの方からご質問ご意見をいた

だきより一層研究への熱が高まり、貴重な場になったと思っております。無事全プログラムに参加し 2 日間のタイムキーパー等の仕事を終えて、ひと息ついているタイミングで授賞式が開催されました。今年も様々な“線虫”に関する研究発表があり、濃厚な余韻に浸っていた最中、受賞者として呼ばれた際は驚きのあまり椅子から落ちそうになりました。この時ばかりはオンライン開催でよかったと思いました。今回の受賞は残りの学生、研究生活への励みになります。修了し大学院を去る日まで目の前の研究や実験に真摯に取り組む所存です。

当研究は決して自分一人だけでは進めることが出来なかったと思います。ひとえに多くの方々のご指導、ご協力のもと、進めることが出来ました。特に長谷川浩一先生と博士後期課程 2 年生の長江星八先輩には研究のイロハを叩き込んでいただきました。ご指導ご鞭撻のほど誠にありがとうございました。また最後にはなりますが本大会の企画、運営に携わった方々に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。



左より、筆者、長江先輩、長谷川先生

第 29 回大会に参加して ③

川村 佳己 (明治大学)

はじめまして。明治大学大学院農学研究科修士課程 1 年の川村佳己です。植物線虫学研究室に所属しており、新屋先生の下でサツマイモネコブセンチュウに関する研究をさせていただいております。この度は寄稿の機会をいただきましたため、第 29 回大会の振り返りをさせていただきますと思います。

線虫学会への参加は一昨年開催された線虫学ミーティングを含め、今回が 3 度目となりました。昨年の線虫学会では、聴く側での参加でしたが、本研究室から多くの学生が発表しているのを見て、来年こそは発表したいと強く思いました。それから学会での発表を新たな目標とし、研究を行っておりましたため、今回発表ができて非常に嬉しく思っております。今年は本研究室から私を含め 7 名の学生が発表を行いました。プログラムを確認した際には、全員が同じ部での発表ということもあり、発表は聞けないけれども、お互いに頑張ろうとみんなで励ましあっておりました。

今回の線虫学会ではサツマイモネコブセンチュウの頭部神経細胞配置と少数頭で誘引性を評価できるアッセイ系の構築に関して、インタラクティブ発表をさせていただきました。前回の発表が線虫学ミーティングの線虫学駆け出し部門での発表で、ほとんどデータがない中での発表だっただけに、今回が初めての発表のような感覚でした。私自身、緊張をしやすい性格のため、最初の方はうまく発表することができませんでした。しかし、1 時間の中で発表や質疑応答を繰り返すうちに、緊張も段々と解け、最後にはリラックスして発表することができました。多くの方に発表を聞いていただき、

様々な角度からの質問やコメントをいただいたことで、自分の研究の課題が見つかり、今後の励みとなりました。また、多種多様なテーマの研究を拝聴することができ、分野が異なる研究はもちろん、自分と同じ植物寄生性線虫を扱った研究でもまた違ったアプローチから研究が行われており、新しい知見を得ることができました。加えて、1 日目の一般発表後の「線虫ざんまい」では企業で研究されている方とお話しし、農薬の実情や開発に関して話を伺うことができました。このように普段、なかなか話ができない人と対話できるという点も学会に参加する利点の 1 つであると感じました。今後も、こうした場を通じて、自分の研究をより高めていけるよう、日々の研究に精進していきたいと考えております。

最後になりますが、日頃ご指導いただいている新屋先生、今回の線虫学会の運営に携わっていただいた皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。次回の第 30 回大会では、対面形式の学会として、皆様と線虫トークができるよう願っております。



研究室のメンバー

第29回大会に参加して ④

玉木 芳明 (明治大学)

どうも皆さんこんにちは。明治大学植物線虫学研究室修士1年、線虫研の宝こと玉木芳明です。突然ですが、私の好きな線虫種は供試線虫である *Pelodera strongyloides* です。その理由は多すぎて列挙しきれませんが、なんとか3つまで絞ってお伝えしたいと思います。1つ目はこの子のフォルムがとても可愛いということです。フォルムが可愛いなんてある？とお思いの方も多いでしょう。しかしながらこの子はまんまるく太っており、“ぽてぽて”とした体型をしています。こんな体型のこの子が必死に動く様は赤ちゃんがハイハイしているようで、愛おしく感じます。癒されます。2つ目は植え継いですぐの培地でよくみんな仲良く集合しているところです。みんな仲良しなのでパーソナルスペース等は関係なく、揉みくちやになりながら餌を食べているところをよく見ます。いつか混ざりたいものです。3つ目は雌が交尾栓を付けられてもお構いなしに交尾栓の中に卵を産むところです。まず、交尾栓が何かわからない方がいると思うので軽く説明させていただきます。交尾栓とは、交尾後に雄から雌の生殖器につけられる栓で、他の雄の精子の侵入を防いだり、精子の流出を防いだりする役割があるといわれているものです。いわば、雄から貞操帯をつけられるのです。しかしながら、この種の雌はそんなこともお構いなしでこの交尾栓の中にパンパンになるまで卵を産み、その“受精卵袋”をまるでサンタクロースが担いでいるかのように移動しているのです。その頑張っている様は人々を感動の渦に巻き込むでしょう。この光景を目にしたあなたはきっと自然とサライを口ずさんでいることと思います。

以上のことから私は *P. strongyloides* が大好きです。といったように私は日頃、大好きな線虫たちに囲まれながら楽しく実験に取り組んでいます。

今回の線虫学会では『*Pelodera strongyloides* における交尾栓の役割と形成行動』という題で発表させていただきました。線虫学会に参加するのは今年で2度目になるのですが、交尾栓という聞き馴染みのないような研究対象にも関わらず、多くの方々に聞いていただき、質問、アドバイス等もして頂いて線虫学会員の皆様の温かさに感銘を受けています。研究成果を色々な方々に評価してもらい、様々な視点からご意見をいただけるこのような機会は今後のモチベーションや新たなアイデアを模索するのに大切な場であると思っております。来年はより良い研究結果を発表できるよう頑張りたいと思います。最後に、大会委員長の吉賀先生をはじめ、大会運営に携わった方々に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。来年こそは対面で開催できること、皆様に直接お会いできることを願っております。



筆者の愛する *P. strongyloides*。この丸い体型が本当に可愛い

第 29 回大会に参加して ⑤

杉山 大騎 (中部大学)

中部大学環境生物科学科・長谷川研究室所属の杉山大騎と申します。この度は日本線虫学会第 29 回大会でのインタラクティブ発表という貴重な機会を頂き、誠にありがとうございました。

今回は大会参加報告に加え、私が線虫学を学ぼうと考えたきっかけ、また研究生活についてお話させていただければと思います。

私は大学入学時から大学院進学を考えておりましたが、はじめはどの分野、どの学問を専門に学んでいこうといった考えが特にありませんでした。そんな状態で過ごしていた学部 1 年生の時、講義の一部として紹介された昆虫病原性線虫の話題が印象深く、そのことがきっかけとなり、線虫学を幅広く学べる現在の研究室に配属希望を出しました。配属されてからは、ただひたすら線虫と向き合う毎日となり、今では常に線虫のことが頭の片隅にあり、何気ない時に「こんな実験をしたら面白そうだ」などと新たな実験を思いつくときもあります。

私は研究を主軸として、アルバイト、家事・自炊などに追われた生活を日々送っています。研究に没頭してしまい、夜中に帰ることや汚れたまま帰ることも多々あります。1 人暮らしの大学生という点を活かし、自分のペースで生活できることが大きなメリットと感じています。ただ、自身が食べる料理を作る時間よりも、線虫、また細菌用の培地を作っている時間のほう

が遥かに長く、さらには手も込んでいることに気づいてしまいました。もう少し自分の食べる食事にも気を遣わなければと思っています。

私は今回の「日本線虫学会第 29 回大会」が初の参加となりました。学部生での参加かつ初学会ということもあり、発表前は緊張もしましたが、活発なディスカッションができ、多くのレスポンスをいただくことができ、発表時間中は非常に有意義な時間を過ごすことができました。今回発表させていただいた自身の研究について様々な大学の学生、大学院生、教授の方々、研究機関の方々から多くのレスポンス、アドバイスをいただくことができ、自身の偏った考えだけではなく様々な視点から改めて研究に向き合い、今後進めていく研究の幅を大きく発展させることができました。

また、自分と同様に線虫の研究を行っている方々の発表は聞き入ってしまうほど非常に興味深い発表ばかりでした。

来年度から私は大学院に進学します。来年度からはより一層研究に力を入れ、さらなる線虫学の発展に努めたいと考えております。

最後になりますが、今回「日本線虫学会第 29 回大会」を運営して下さった皆様、またご意見をいただきました皆様にこの場を借りて、改めて感謝を申し上げます。

第 29 回大会に参加して ⑥

神山 匠己 (龍谷大学)

皆様はじめまして。龍谷大学農学部 4 年の神山匠己 (こうやまたくみ) と申します。植物線虫学研究室に所属しており、浅水先生のもとで *M. incognita* に関する研究をさせていただいております。

この度、日本線虫学会ニュースに寄稿する機会を頂き誠にありがとうございます。日本線虫学会第 29 回大会には昨年に引き続き参加させていただき、今回は「サツマイモネコブセンチュウエフェクター遺伝子のクローニング」というテーマでブリーフプレゼンに参加させていただきました。今回が初めての学会発表であり、非常に緊張しましたが想像以上に多くの方々に発表を聞いていただき、また多くのご意見、アドバイスもいただくことができ、貴重な経験を得ることが出来ました。

私が所属している研究室では植物寄生性線虫を主に扱っているため、線虫学会で自活性線虫や動物寄生性線虫、昆虫病原性線虫などの植物寄生性線虫ではない線虫の研究発表を数多く拝聴し、非常に新鮮で線虫の世界、知見が広がり大変勉強になりました。また、今回は初め

て発表する機会をいただき、資料作成などの発表準備の大変さを痛感しました。当研究室では週に 1 度のゼミで論文をプレゼン方式で発表を行っていますが、論文ゼミとは資料の見せ方が違い経験の少ない資料作成では発表当日まで苦戦しました。しかし、今後の課題や説明の仕方等、自分の研究を見つめ直す貴重な機会になりました。

現在、私は「トマトの *Mi* 抵抗性を打破するサツマイモネコブセンチュウ因子の探索」というテーマで研究に取り組んでいます。サツマイモネコブセンチュウは、世界中の作物に甚大な被害を与えており、その被害の中心となっているのがサツマイモなどの根菜類やトマトなどの果菜類です。本研究を通して、線虫害を減らす一助となるような農業の現場に還元できる結果を出せるように邁進していきたいと考えています。

今後とも機会があれば積極的に参加させていただきたく存じ上げます。ありがとうございました。

今村重元氏と一戸文庫のこと

荒城 雅昭

広報幹事（学会ニュース編集担当）の酒井さんから、線虫学会ニュースに掲載の線虫学（会）の先人の紹介記事（シリーズ名はついていないが）で、今度は今村重元氏を取り上げたいとのこと、筆者に執筆依頼があってから、すでに1年はゆうに過ぎていと思う。今村氏は筆者の卒業した大学の先輩（学部・学科まで同じ）ということで、既存の追悼記事以上の情報を期待されていたし、研究現場を離れた今、大学に氏に関するアーカイブが残されていないか調査をするのも一興と、引き受けるだけは引き受けたのであるが、当時コロナウイルス蔓延防止のため非常事態宣言が出されるような状況で、すぐには上京しての調査が困難で時間が必要とも申し上げていた。

コロナウイルスは新しい変異株がどんどん出現し、第6波が収まらないうちに7波を迎えているようで、終息も見通せないと思う。大学のアーカイブの調査は今後実施したいと思うが、ひとまず既存の情報を取りまとめ、今村重元氏の人となり、業績などを紹介することとしたい。

今村重元氏は、明治37年2月11日東京市本郷区（現在の文京区）の生まれ（1）、昭和2年東京帝国大学農学部農学科入学、昭和5年同学部卒業、専攻は農業動物学で、土壌線虫の分類並に生態について研究し、卒業後も研究室に留まって研究活動を継続した。在学中の昭和4年に既に1報報文があり、招かれて蠶業試験場に奉職する昭和7年前後のわずか6年で、「Nematodes in the paddy field, with notes on their population before and after irrigation.」（2）を始めとする線虫に関する報文、都合15

報を発表された。この業績、特にその研究活動の密度の高さは、筆者など到底足元にも及ばないまさに超人的なものであった。なおその間、昭和5年から7年にかけて応用動物学雑誌の編集幹事を務めている。蠶業試験場に奉職後は、主たる研究対象を嚙蛆蠅（カイコノウジバエ）としたが、昭和9・10年（没年）に3報を上梓しており、研究活動の勢いは変わらなかった。それだけではなく、それまでの分類・生態学的観点ではなく生理学的見地に立って研究を行い、「斬新なる創意に基く各種の^{じっけん}実験を行ひ多忙な月日を送った。實に君は若くして^{おう}應用動物學の眞髓を把握し、^{しか}而も烈々たる責任感を以てよく其の職責を果したと言ふべきである。」（1）と評される、幅広い視野の持ち主であった。

氏はまた、「君は資性明朗、藝術的天分に恵まれ、帝大音楽部員としてヴィオラを弾じ、又スポーツ・マンとしてボートを漕ぎ、投手として巧妙なピッチングに相手方の^{きも}膽を寒からしめ、^{しばしば}屢々スキーヤーとして山野を滑走したものであった。」（1）と評される、多芸多才の人でもあった。そして、昭和8年には結婚して男子を設け、「和氣^{わきあいあい}霽々たる家庭を営ん」で、順風満帆の人生が氏の目前に広がっているかと思いきや、病を得て昭和10年5月26日には亡くなってしまふのである。しばしば引用してきた追悼文（1）には、「洵に痛惜の念に堪へない。君病^{やまい}革^{あらたま}るも一言家事に^ふ觸れず、専ら仕事を案じつゝ永眠したとは、實に君の面目躍如たるものあるを^{しの}俛ばせる。」とある。

今村氏が長生きされ、蚕業関連の研究の片手間でも線虫に関する研究を続けることがあれば、我が国の線虫研究、なかんずく土壌の自活性線虫に関する研究は、氏の業績を土台に発展することとなったであろう。そうすれば世界の斯学^{しがく}に劣ることなかりしにと思えば、真に氏の夭逝^{ようせい}は惜しまれる。

ただ一つではあるが、今村氏の名前はイマムラネモグリセンチュウ *Hirschmanniella imamuri* Sher、1968の種小名となって、これは将来にわたって伝えられて行くことは間違いない。もちろん和名も使われていくであろう。ザトウムシ類に見られる種小名 *imamurai* は今村重元氏とは関係がない。

農業環境技術研究所線虫・小動物研究室には、なぜか「Nematodes in the paddy field, with notes on their population before and after irrigation.」(2)の別刷が、何十部という数で伝えられているが、今村氏が収集された文献類は、他はほぼ皆無であった。静岡県農試に引き継がれたとも仄聞^{そくぶん}していたが、残念なことには失われてしまったようである。

筆者は再雇用の期間が終了する前のこの数年、線虫・小動物研究室に伝えられていた一戸稔氏が収集していた文献類、いわゆる「一戸文庫」のデジタル化に取り組んで、その書誌情報のテキスト化を終えて、別刷・複写物などの現物とともに農研機構植物防疫研究部門の方に引き継いでもらった。その作業の中で一戸氏を始めとする当時の研究者の蔵書印の数々に触れ、今村氏の収集された文献の痕跡かもしれない不思議な「印影」を見出したので、他いくつかの特徴的な蔵書印とともに紹介して、情報提供したい。

かつて研究者の中には、凝った蔵書印を作成して使用する方がいらした。まずは一戸氏の印

影2例、これは外せない。一つは名前だけで英字の字体（今あるフォント名で Olde English Regular あたりか）にこだわりが見られるが、珍しいというほどのものではない(図1、2)。

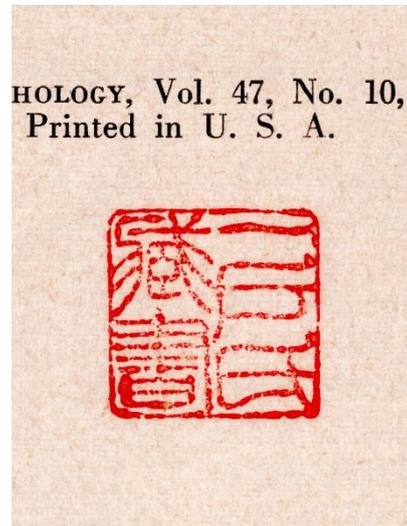


図1. 「一戸蔵書」印



図2. 「Minoru Ichinohe」印

次(図3)は木下周太氏(元日本昆虫学会会長、元農事試験場昆蟲部主任(3))。大きい、手作り感満載!なぜこれが押された別刷(他にもある)が「一戸文庫」に伝わったのかは謎。一戸氏に伺うことができれば一つの物語になったかもしれないが、これはかなわぬ夢となってしまった。図4は桑山覺氏の蝶デザインの蔵書印。桑山氏が1951年にアメリカ調査旅行をされた際に入手されたものであることを読んで取ることができる。一戸さんの奥様の御父様である桑山氏は、我が国では北海道のみに産する「クワヤマトラカミキリ」に名を残す著名な昆

虫学者で、北海道農業試験場と北海道立農業試験の場長を兼任するなど活躍された(4)。アメリカで収集された文献の1つが娘婿の専門分野のものであったことから、後に譲渡されたものと想像される。ニカメイチュウ問題の解決により、昭和17年に木下氏とともに富民協会から表彰を受けられている(3)ことにも縁を感じる。

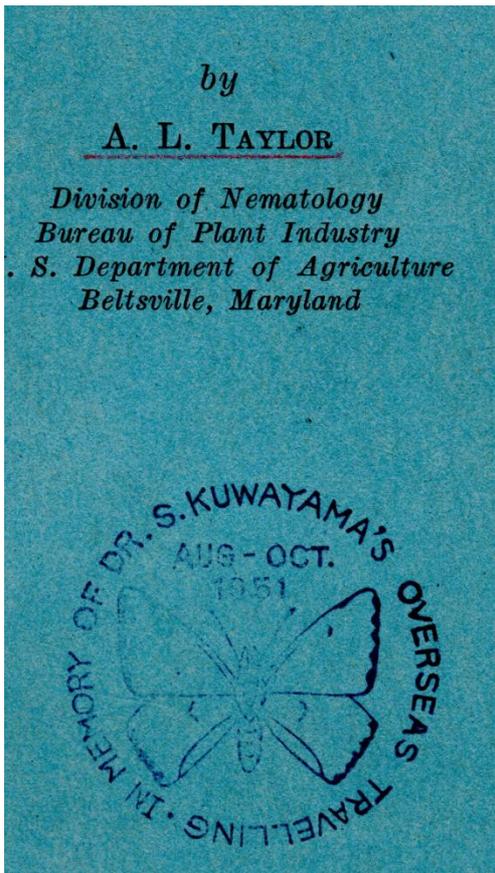


図3. 桑山氏の蝶デザイン蔵書印

さて最期が問題の不思議な「印影」(図5)。何だこりゃ、でも最初の文字は「今」以外とは考えられない。2字とも反転されているとしたら、2字目の旁は「木」ということになるが、そのような漢字は「林」だけと思う。よって次の文字の部首は木偏であることはほぼ確実。「村」なのではなかろうか。ちなみに、線虫関連文献の著者で「今」で始まり木偏の字が続く姓は「今村」だけ。他にもこの印影が残された

別刷があるのではないかと期待しながら作業を進めたが、結局この1例だけで断定は避けたい。



図4. 「木下蔵書」印



図5 不思議な「印影」、反転はしていません。

今日、日本線虫学会誌を始め、かなりの学術雑誌がJ-Stageなどを通して、あるいは発行団体のHPなどで閲覧できるようになっている。また古い文献も、「Nematodes mostly Australian and Fijian」(5)等々、相当程度online閲覧が可能になってきており、著作権の関係から、かえって発行から60年、70年と遡る非常に古典的な文献の方が、オープンアクセスになって見ることができる例が多い(報文タイトルで検索するのが普通の見つけ方)。「一戸文庫」所蔵の別刷・コピーなどにもonlineで閲覧可能な

ものが相当数含まれるが、そうでないものを選び出し、.pdf ファイル作成がされる見通しとなっている（失われることは避けられた。しかし時間はかかるであろう。農研機構農業環境研究部門図書室に所蔵があるものも除いた。）。また.pdf ファイル作成後、それらが公開できるかどうか、私には判断が付かない。.pdf ファイル作成までは私の力が及ばず、農研機構植物防疫研究部門の方々、特に酒井さんにはお手数を煩わすことになってしまい心苦しいが、この駄文を草することで、いくぶんかの罪滅ぼしと致したい。

引用文献

(1) 吉川徹雄 (1936) 今村重元君を追悼す. 應用動物學雜誌, 8(4), 235-236.

- (2) Imamura, S. (1931) Nematodes in the paddy field, with notes on their population before and after irrigation. *Journal of College of Agriculture, Imperial University of Tokyo*, 11(2), 193-240.
- (3) 江崎悌三 (1955) 木下周太先生. *昆蟲*, 23(3), 91-96.
- (4) 中島敏夫 (1982) 桑山覚先生の逝去を悼む. *昆蟲*, 50(2), 348-349.
- (5) Cobb, N. A. (1893) Nematodes mostly Australian and Fijian. *Miscellaneous Publications / Department of Agriculture, New South Wales*, 13, 1-59, 7pls.

[書評]

「線虫 1ミリの生命ドラマ」(長谷川 浩一 著)

竹内 祐子 (京都大学)

「大学で線虫学の講義をする際に適当な、日本語で書かれた教科書がない(から誰か書いてほしい)。」

線虫学関係者なら一度は耳にしたことがあるだろうこのフレーズ、以前から(それこそ私が学生だった〇十年前から)言われていたことではあるが、本書は内容の質・量ともにそんな教育現場の声に答える良書と行ってよいだろう。著者の「この手の本にはめずらしく編著ではなく単著である」長谷川浩一氏は、ここでいまさら紹介する必要もないかもしれないが、京都大学と中部大学で線虫学、応用昆虫学、遺伝学を修め、農学博士号取得を経て現在は中部大学応用生物学部で教授として研究室を主宰している(そして日本線虫学会の現事務局長でもある)。線虫学と聞いて一般にイメージされるのは、おそらく *C. elegans* を研究対象とした生命科学だろう。しかし実際に線虫学に携わる研究者およびそのコミュニティは現状、同じ線形動物門に属する生物を取り扱ってはいなくても、残念ながら *C. elegans* かそれ以外かに二分されることが多い(そして線虫学という「それ以外」を指すことが多い)。長谷川氏は両分野の心理的および技術的なギャップを越えて、いわば *C. elegans* も線虫の一種として研究を展開してきた稀有な存在といえる。そんな著者の線虫愛が詰まった本書は、どちらの分野の研究者にとっても新しい発見がある、一読の価値のある一冊となっている。

本書で取り扱われている線虫は *C. elegans* (第1章ほか) やマツノザイセンチュウ(第4章、第8章ほか) はもちろん、植物寄生性、昆

虫便乗性、昆虫病原性など著者自身が研究対象としている分類群、さらには捕食性や海産自活性、ヒトを宿主とするような動物寄生性まで一日常生活ではおよそお目にかかれなような種まで幅広い。また、これは著者がモデル生物たる *C. elegans* を長年研究してきたからだろうか、線虫そのものの話にとどまらず、線虫をモデルケースとしつつも寄生と共生(序章、第6章)、生物の進化や系統分類(第3章)、発生および生活史(第4章)、性と生殖(第5章)、遺伝(同)、そして免疫(第6章、第7章)など、生物学の壮大なテーマに関する議論に紙面の多くを割いている。後半では線虫にまつわる現代の社会問題の事例として熱帯病(第7章)や外来種問題(第8章)を取りあげ、さらに研究材料としての線虫の有用性や線虫学の展望(第9章)を述べて線虫および線虫学のもつポテンシャルを指摘しつつ、おそらくは将来の線虫学者への期待を込めつつ結ばれている。

あとがきによると一般の(線虫専門の研究者以外の)読者を想定して書かれたらしい本書は、たしかに内容こそ盛沢山ではあるものの、読者のバックグラウンドや予備知識をさほど要求していない。文体の平易さもさることながら、ゴキブリの寄生線虫やアニサキスなど身近な事例を紹介しながら、時には実験の失敗談も交えながらテンポよく展開されており、生物に興味のある高校生～大学生であれば1冊すると読めてしまうだろう。特に研究を志す若者にとっては、線虫に関する知識を習得しながら、調査・実験とは、研究生活とはどのようなものなのかイメージするのにちょうどよい入門書

となるに違いない。線虫には昆虫やきのこなど幼少期からの愛好家の多い分野と比して肉眼で観察できないという弱点があるが(線虫マニアですという子どもに出会えないのは、これも一因だろう)、本書では豊富な線虫の顕微鏡写真、実験装置や生活史等の図解によって、そのとっつきにくさもかなり軽減されているように思う。特筆しておきたいのは「まだわかっていないこと」まで包み隠さず書かれていることだ。面白そうなこと、重要な知見が隠れていそうなことが惜しげもなく詳述されており(同業者としてはちょっと心配になったりもするが)、これからの線虫学が挑むべきテーマのヒントがそこかしこに散りばめられている。線虫学に足を踏み入れたばかりの学生にとっては指南書として、既に線虫学にどっぷり漬かっている研究者や教員にとってはよき相棒として、また

新しいテーマに手を出してみたい時の手がかりとしてもおすすめだ。

冒頭の話に戻れば、現時点で入手できる線虫学の教科書として本書は間違いなく第一候補となるだろう。「線虫ってなに?」と聞かれたときにまずこれを読んでみて、と紹介できる本を上梓してくれた著者に感謝したい。

[書誌情報]

「線虫 1ミリの生命ドラマ」

著 者：長谷川 浩一

頁 数：312

出版社：dZERO

発売日：2023/2/10

価 格：2,400 円 (税別)

ISBN-13：978-4-907623-58-6



編 集 後 記

◆昨年度に引き続き、今年度も大会はオンラインでの開催となりました。今回は参加者の全員が学生さん達の発表の審査に参加できる、という新しい試みが導入され、2人が若手研究者優秀賞を受賞されました。今回は受賞した2人に加え、4人の学生さんから参加報告をいただくことができました。参加報告でもそのことに触れておられる方がいましたが、来年度は対面での開催となり、より学生さんたちのモチベーションを高まるような大会になるといいなと思います。今号では、大会参加報告に加え、元農環研の荒城さんによる今村重元氏の紹介記事、京都大学の竹内先生による長谷川先生の著書の書評を掲載することができ、ボリュームのある号となったのではないかと思います。執筆者の皆様にお礼申し上げます。(与謝野)

「フジワラ」の線虫関連機器

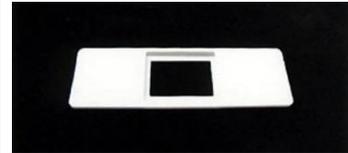
パーラン法によって線虫を分離
線虫分離装置



シスト線虫の分離に
シスト分離装置



裏表両方から視察できる
H-S スライド



表層土壌の線虫採取に
線虫スコップ



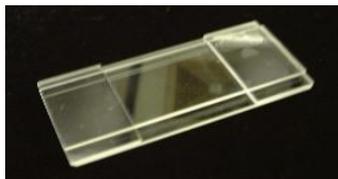
線虫の計数に便利
シラキウス時計皿



線虫の保存に
線虫固定皿



1ml 中の線虫計数に
線虫計数板



安価に計数したい方は
プラクソ格子枠付スライド



長時間の視察にも目に優しい
シスト計数皿



株式
会社

藤原製作所

〒114-0024 東京都北区西ヶ原1-46-16

Tel 03-3918-8111 Fax 03-3918-8119

E-Mail info@fujiwara-sc.co.jp

☆詳しい情報はホームページで！→ <http://www.fujiwara-sc.co.jp/>